二〇〇九年三月イタリアにおける漆器調査の報告

永島明子

はじめに

二〇〇九年春、イタリア共和国とヴァチカン市国に伝わる漆器の調査を計画した。目的地はローマ、ロレート、そして、フィレンツェの三地点である。調査先との連絡には在京都イタリア国立東方学研究所のシルヴィオ・ヴィータ所長、スティッベルト美術館学芸員のフランチェスコ・チヴィータ博士、イタリア在住の美術史家である小山真由美氏の協力を得た。特に小山氏は、二〇〇〇年と二〇〇一年の『鹿島美術研究』[1]において、「在伊日本美術工芸品及び在欧在日関連美術工芸品調査」と同継続調査の報告をまとめられており、どの美術館に漆工品が保管されているかを具体的に示してくださった。このうち、今回筆者が見学・熟覧の機会を得たのは、ヴァチカン伝道民族博物館、イタリア国立東洋美術館、ルイジ・ピゴリーニ国立民族学博物館、聖なる家大聖堂文書館、ピッティ宮銀器美術館、バルジェッロ国立美術館、スティッベルト美術館の七施設である。以下に各地での調査内容を報告する。

一、ヴァチカン伝道民族博物館

十六世紀の初めから、歴代法王によって拡張されてきたヴァチカンの美術館群の中で、伝道民族博物館は、一九二六年にオープンした比較的新しい美術館である。その前年にラテラノ宮殿で宣教をテーマに開かれた展覧会をきっかけに、時の教皇ピオ十一世によって設立され、一九六三年まで同宮殿におかれていたが、一九七三年にパウロ六世によって現在のヴァチカン内の建物に移された。[2]宣教をテーマとした民族学博物館であるため、収集品の中核は各国の宗教儀礼にまつわる器物や装束、キリスト教の布教史を示す文物であるが、歴代法王に献上された贈答品も数多く保管しており、現在の収蔵品は八万点を超えるという。日本の漆器は法王への贈答品のうちに見出だされた。現在は非公開の展示室に日本の工芸品がまとめられており、ガラス展示ケースに並んでいるので、全体を見渡すことができる。時間が限られていたので、その中の数点を選んで熟覧をお願いした（表1）。学芸員助手のナディア・フィウセッロ女史

と保存修復担当ステファニア・パンドッツィー博士や修復チームのメンバー四、五名で対応してくださった。

興味深いことに美術館の台帳に、寄贈者として、古河虎之助、藤田平太郎、小笠原長幹と推定されるローマ字表記の名があった。カトリック信者でなかったと思われる政財界の重鎮らが、昭和初年にローマ教皇に進物を贈っているのはなぜであろう。当時の日本とイタリアの親しい関係から、ローマを訪問する機会があり、ヴァチカンへも表敬のため献上品を納めたものか。近代史の痕跡として参考になるかもしれない。

非公開エリアには大量の中国漆器も保管されており、順次、保存処置が進められている。

二、イタリア国立東洋美術館（ローマ）

一九五七年に大統領令によって設立され、翌年に公開された美術館である。[3] 名前は直訳すると「ローマ国立東方美術館」であり、中近東のコレクションも充実している。日本部門は、一九六四年に東京国立博物館との蔵品交換でもたらされた縄文後期から古墳時代にかけての考古遺物にはじまり、近代までの品を収蔵する。次項で紹介するルイジ・ピゴリーニ国立民族学博物館とのあいだで蔵品の調整もあったようである。ちなみに東京国立博物館には、エトルリアの陶器が贈られた。

十八世紀に建てられ、十九世紀には王族が住んだ屋敷（通称ブランカッチオ宮、映画「ローマの休日」の撮影舞台ともなった）のワン・フロアを間借りしているため、ロココ調の寝室だったと思われる部屋の内装をそのままに中国古代陶器の展示ケースが据えられたりして、独特の雰囲気を醸している。

熟覧は考古学を専門とするロベルト・フィオッカ博士が対応してくださった。収蔵庫は訪れず、作業室で作品を順次開梱していただいた。いずれの作品も外箱はなく、フランネルのような柔らかな布で覆われている。近代の文様が華やかな作例が多かった（表2）。

三、ルイジ・ピゴリーニ国立民族学博物館（ローマ）

十六世紀末に建てられたイエズス会のコレッジオを利用して、一八七六年に、ルイジ・ピゴリーニ（一八四二―一九二五）によって先史時代と民族学をテーマに設置された博物館。[4] コレッジオにはもともと、アタナシウス・キルヒャー（イエズス会神父にして中国研究の先駆者であったドイツ人。一六〇二―八〇）が熱心に収集した中国やアメリカ大陸の文物と古代エジプトやローマの遺物がすでに収蔵されていた。博物館は、一九四二年のローマ万博の科学館として建てられた施設に、一九六二年から七七年にかけて移された。館名の直訳は「国立先史・民族学博物館ルイジ・ピゴリーニ」である。日本の美術品は民族学コレクションのアジア部門に収蔵されており、特に、一八八八年と一九一六年の二度に渡って購入されたヴィンチェンツォ・ラグーザ（一八四一―一九二七）とその妻、清原多代（お玉・一八六一―一九三九）の収集品が大半を占める。

ラグーザは明治政府が工部美術学校の教授として雇った外国人の一人で、彫刻家であった。女流画家の清原多代を連れて故郷シチリアに帰り、美術学校を設立した。この学校の設立には、お玉の姉夫

挿図３　葵紋散らし蒔絵硯箱
（ルイジ・ピゴリーニ国立民族博物館蔵）
Photo by the author/©Soprintendenza al Museo Nazionale Preistorico Etnografico Luigi Pigorini

挿図１　楼閣山水蒔絵沈箱
（ルイジ・ピゴリーニ国立民族博物館蔵）
Photo by the author/©Soprintendenza al Museo Nazionale Preistorico Etnografico Luigi Pigorini

挿図４　同上

挿図２　同上

婦もイタリアに渡って協力している。姉は刺繍の職人、義兄は塗師であり、ラグーザは日本の伝統的な美術工芸技法を教える学校をヨーロッパではじめて設立したことになる。[5]

熟覧には、アジア部門を担当する民族学者、ロレッタ・パデルニ博士が懇切丁寧に対応してくださった。収蔵庫は数か所に分かれており、漆器はビニール袋に覆われてスチール棚に並んでいた。時間が限られていたので、その場で作品を選ばせていただいた（表3）。

ラグーザ・コレクションに属さない作品の中で、十七世紀第四四半世紀の輸出漆器と思われる沈箱（表3通番17／図版11／挿図1、2）と、十七世紀半ばの徳川家に関係する硯箱（表3通番16／図版12／挿図3、4）が目を引いた。キルヒャーのコレクションにすでにあった可能性が高いのだが、葵紋を散らした硯箱は、イエズス会に繋がるルートを想像しにくく、どのようにしてイタリアへ渡ったのか興味を引くところである。

また、ラグーザの美術学校の名が記された西洋家具も特異な存在である（表3通番29／図版13／挿図5～7）。[6] 肉眼で観察するかぎり、確かに漆を塗って金属板を象嵌しているように見えるのだが、机の形は西洋式であり、錫板の象嵌はルイ十四世のころに流行したブール象嵌の伝統に則っているようにも見え、類品を思い浮かべることができない。日本の伝統技術を西洋の工芸技法に融合させた、十九世紀には大変珍しい試みであったといえるの

挿図５　花唐草平文卓
（ルイジ・ピゴリーニ国立民族博物館蔵）
Photo by the author/©Soprintendenza al Museo Nazionale Preistorico Etnografico Luigi Pigorini

挿図６　部分
Photo by the author/©Soprintendenza al Museo Nazionale Preistorico Etnografico Luigi Pigorini

挿図７　同上

もあり、たいへん有意義な調査となった。

四、聖なる家大聖堂文書館（ロレート）

ロレートの漆器は、二〇〇八年秋の小山氏の報告によって日本の研究者の間でも知られるようになった。[7] ロレートは、アドリア海に面した小さな町であるが、町の中心となっている大聖堂に、聖母マリアが生まれ育ったナザレの家（聖なる家）とされる石造りの小さな家を祀っているため、カトリック世界では古くから知られた巡礼地であった。一五八五年には、ローマから日本へ帰る途中の天正遣欧少年使節一行も訪れている。問題の漆器は、イエズス会の紋章を蒔絵と螺鈿で表した南蛮様式の書見台二基である（表4）。二基とも大聖堂に併設されている文書館に、布にくるまれて保管されており、熟覧には担当のシスター・ルイジア・ブザーニが対応してくださった。

二基のうち一方は損傷が著しい。一般的な作例に比べて紋章がやや縦長であることをのぞいて、典型的な南蛮様式の書見台である。

もう一方は保存状態は比較的よいものの、星形の文様など、ほかでは見られない珍しいモチーフが組み合わされている。また、下地の造りの違いのためか、表面に中国製漆器によく見られるひびが入っている。この二基めの書見台に見られるような、雲を二重線で縁取りその中に手慣れた様子で菱形を描く方法は、中世の漆絵職人の仕事に通じるようでもあり、また、日本の絵巻物や屏風絵などの装飾を模したようでもある。この雲は絵梨地風に仕上げられているが、拡大鏡で見ると、消粉のような微細な金粉が表面に乗っている

ではないだろうか。

なお、パデルニ博士は大量の資料に囲まれながらほぼ孤立無援で日本研究に奮闘していた。博士たっての希望により、帰国後、東京のラグーザ研究者を紹介することができた。その後、両社の間で共同事業も展開されることとなったようである。こうした副次的成果

だけで梨地ではない。平蒔絵に当たる部分も消粉蒔絵である。背面の柘榴風の植物にいたっては、葉や実のところどころを絵梨地でなく朱漆で描いている。この植物の、根もとが下草で覆われている様子や、幹が蔓植物のように伸びる姿には、中国のみならずインド的な装飾美術の要素も感じられる。小山氏もこの二基めについては、日本製の書見台を見本にアジアの別の場所、たとえばイエズス会の布教の拠点であったマカオなどで制作されたと推定している。

文書館では、損傷の激しい書見台の修理を希望しているが、遠方への運送は避けたいとのことだった。保存方法を少しでも改善できるようにと願い、帰国後、薄葉を郵送した。

五、ピッティ宮　銀器美術館（フィレンツェ）

ピッティ宮はかつて歴代トスカーナ大公やイタリア国王が暮らした宮殿だが、現在は六つの美術館を擁する国立の文化施設である。六つの美術館のひとつが銀器美術館である。[8] 館名の英訳が「メディチ宝物館」となっているところからもわかるように、メディチ家の暮らしを彩った美術工芸品を収蔵品の核とする。小山氏の報告[9]にあるとおり、宮殿内の別の美術館である近代美術館の管轄に、かつての「中国の間」があり、そちらにも日本製の輸出漆器が並んでいるが、現在は非公開であり、担当者と連絡をとることもできなかった。銀器美術館においても、訪問日が先方の特別展オープンの時期と重なってしまい、今回は展示室でのガラス越しの撮影を特別に許可していただくに留まった。メディチ家に伝わった輸出漆器の一部（表5）が、大量の輸出磁器（中国製・日本製）とともに、にぎやかに、しかし、美しく展示されていた。いずれの作品も「東インドからトスカーナの宮殿へ」と題された、ピッティ宮の中国・日本美術を特集したイタリア語の図録に収録されている。[10] 磁器とともに並べやすい椀、皿、水差しを、中国の間から引き抜いたようである。十七世紀末から十八世紀のはじめにかけて、ヨーロッパ各地の王侯貴族が集めた日本製輸出漆器の典型といえる。保存状態は大変よかった。

近代美術館の管轄にある漆器については、小山氏が南蛮様式の筒形箱を学会誌上で詳しく紹介している。[11]

六、バルジェッロ国立美術館（フィレンツェ）

十三世紀半ばに市民の統領のために建てられ、後に執政長官と司法評議会が使った建物を利用して、一八六五年に設置された国立美術館。ドナテッロやミケランジェロなどルネッサンスを代表する彫刻の傑作で有名だが、メディチ家の武器、陶磁器、メダル、タペストリーなど、多様なコレクションも収蔵する。天正遣欧使節にまつわる長刀があるとの情報を得て調査を願い出たが、拝見した長刀の黒塗りの柄と飾金具の制作年は、天正期まで遡るようには思われなかった（表6）。この外、メディチ家が所有した各国の武器コレクションの中に、十七世紀のペルシャで作られたという螺鈿の楯があり、通常いわゆるインド・ポルトガル美術に分類される技法・文様が、ペルシャにもあったようすを実物で知ることができた。江戸時代後期から現代までの日本の刀剣も飾られていた。

挿図10　同右

挿図８　草花蒔絵螺鈿小洋櫃
（スティッベルト美術館蔵）

挿図11　同上　部分

挿図９　同上

七、スティッベルト美術館（フィレンツェ）

十九世紀の富豪がフィレンツェ郊外の自邸を収集品で飾り付け、その屋敷ごとフィレンツェ市に寄贈してできた美術館[12]。フィレンツェ生まれのフレデリック・スティッベルト（一八三八―一九〇六）は、イギリス人の父とイタリア人の母の間に生まれ、イギリスで教育を受けた。二十歳のころ、莫大な資産を相続して以降、美術品を買い続けた。生涯独身で子がなく、コレクションを市に寄贈した。収蔵品の中心は各国の武具と装束だが、ヨーロッパ中世の木像彫刻やルネサンス期の絵画なども含み多彩である。スティッベルトは、収集品を制作地と時代によって各部屋に割り振り、マネキンを活用した再現展示をしたので、テーマパークのような楽しさのある美術館である。スティッベルトが日本の武具に出会ったのは晩年であったようだが、かなり精力的に収集したらしい。明治時代の弓を持つ生き人形と、スティッベルトの指揮で作られたイタリア製のマネキンに甲冑を着せた騎兵や、槍を持たせた歩兵などが、二階の大広間で客を待ち受けている。この広間にガラスケースが立ち並び、数百点に上る鎧兜・刀剣・鍔などとともに、漆工芸品が収蔵・展示されている。このケースから作品を選んで見せていただいた（表7）。担当学芸員フランチェスコ・チヴィータ博士は出張が重なり、助手のリカルド・フランチ氏に熟覧の対応を頼んでくださった。

古いものでは、南蛮様式の小さな櫃がひとつあった（表7通番43／図版14／挿図8～11）。

また、大変珍しい蒔絵の曲彔が目をひいた（表7通番44／図版15

挿図12　蓬莱葵紋蒔絵交椅
（スティッベルト美術館蔵）

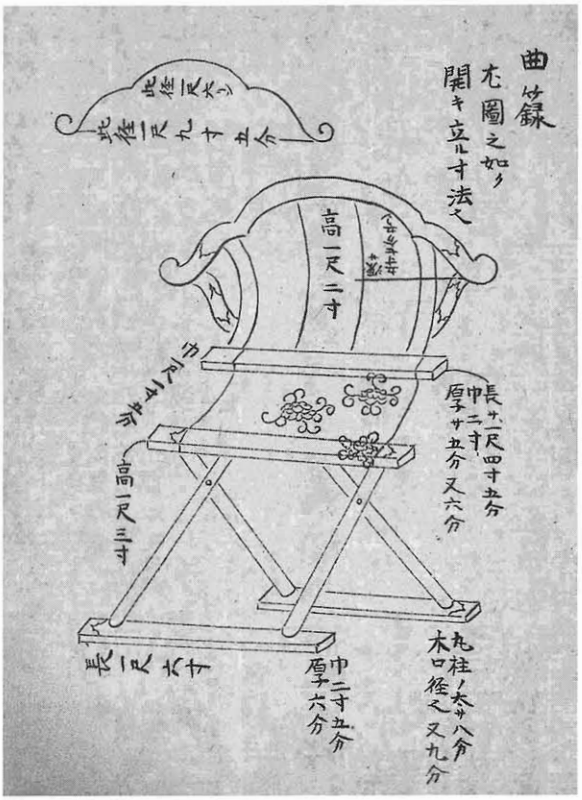
挿図13　同上　部分

挿図14　同上

挿図15　同上

挿図16　同右　部分

挿図17　同上



挿図18　『婚礼道具諸器寸法書』
（大正12年　京都帝室博物館写し　京都国立博物館蔵）
より「曲彔」

～17／挿図12～17）。この形の折り畳み式の椅子は、寛政五年（一七三九）にまとめられた『婚礼道具諸器寸法書』にも曲彔として収録されているが（挿図18）、蒔絵が施された実例はほとんど見当たらない[13]。本品の木地は、豊臣秀吉所用と伝える黒漆地の「菊蒔絵交椅」（高台寺蔵）と、形、寸法、面取の方法などがほぼ一致する。足部の底裏まで疎らではあるが梨地とし、背板の表裏に金銀の本格的な蒔絵を施し、文様も吉祥の図であるので、徳川家にかかわる婚礼調度と見て間違いないであろう。背板の表裏に散らされた三葉葵紋も、蝶番の要に用いられた金具の六葉形の葵紋も十七世紀後半の作品に多く見られる形をしている。スティッベルトは日本を訪れたことはなく、作品の多くをロンドンで購入したようであるが、本品がどのような道をたどってフィレンツェに辿りついたのか、興味をひかれる。

大型の婚礼調度としてはほかに、黒漆地に松と梅を描き本多家の家紋を散らした、江戸時代中期の黒棚（表7通番46／図版18／挿図19～24）があった。靴を履いて立ったまま鑑賞する空間に合うように、西洋製の台の上に乗せられている。この台の足元に設けられた棚板には明治期の輸出用パネルがはめ込まれていた。西洋で台を作る場合はふつう、木地のままとするか、黒色塗料で塗るか、金箔を貼るものであるが、手持ちの日本製漆器パネルを活用し「日本風」としているところに、スティッベルトのコレクションの豊富さとスティッベルトが演出にこだわり、楽しんでいたようすが窺われた。

挿図19　松梅丸に立葵丸に本の字紋蒔絵黒棚
（スティッベルト美術館蔵）

挿図20　松梅丸に立葵丸に本の字紋蒔絵黒棚（スティッベルト美術館蔵）部分

挿図21　同上

挿図24　同上

挿図23　同上

挿図22　同上

おわりに

以上が七施設で調査した漆器についてのおおまかな報告である。制作時期も十六世紀から二十世紀までと幅広く、集めた人々の社会的な立場も宗教施設、施政者、学者、芸術家、裕福なコレクターなどまちまちであるが、日本の漆器が長い時代にわたってエキゾチックな高級品として扱われてきたようすがよくわかった。蒔絵は、東洋の一部にしか自生しない漆の樹脂を用いて初めて可能となる工芸で、ラグーザ以外にその複雑な工程を理解した所蔵者はおそらくいなかったであろう。しかし、木製品でありながら、ニスのように茶色く酸化することもなく、金泥のようにはげ落ちることもない金銀の装飾をまとい、繊細な形をしながら、簡単につぶれたり狂ったりすることのない精緻な器物が、世に類い稀であることは、最高級品に囲まれた注意深いコレクターにはすぐにわかることだったのかもしれない。

〈註〉

1 鹿島美術財団『鹿島美術研究（年報第一七号別冊）』二〇〇〇年、『鹿島美術研究（年報第一八号別冊）』二〇〇一年。

2 ヴァチカン美術館公式ホームページ
http://mv.vatican.va/3_EN/pages/MET/MET_Main.html

3 イタリア国立東洋美術館公式ホームページ
http://www.museorientale.beniculturali.it/index.php?en/1/home

4 ルイジ・ピゴリーニ国立民族学博物館公式ホームページ
http://www.pigorini.arti.beniculturali.it/

5 Vincenzo Crisafulli, Loretta Paderni e Maurizio Riotto. *Kiyohara Tama: la collezione dipinta*, Sellerio, Palermo, 2009.

6 前掲、註5の一一四頁と二二八頁参照。

7 小山真由美「イタリアの聖地ロレートに伝世した書見台―現存作品と収蔵目録の記載について―」『漆工史』三十一号　漆工史学会　二〇〇八年。これに先立ち、小山氏はインターネット上に公開されているNTTデータジェトロニクス株式会社の広報誌「SPAZIO」の六十七号（二〇〇八年九月発行）にも「ロレートの書見台は天正使節の贈り物か？」と題してカラー図版付きの紹介文を寄せている。
http://www.nttdata-getronics.co.jp/profile/spazio/spazio67/koyama/index.htm

8 ピッティ宮公式ホームページ
http://www.polomuseale.firenze.it/english/musei/palazzopitti/default.asp

9 前掲、註1。

10 Firenze Musei. *Dalle Indie orientali alla corte di Toscana: Collezioni di arte cinese e giapponese a Palazzo Pitti*. Giunti. Firenze-Milano. 2005.

11 小山真由美「ピッティ宮殿所蔵「黒漆花鳥葡萄蒔絵螺鈿円筒形箱」―メディチ家文書の記録と枢機卿帽子箱の可能性―」『漆工史』二十七号　漆工史学会　二〇〇四年。

12 スティッベルト美術館の公式ホームページ
http://www.museostibbert.it/english/overview.html

13 石川県立美術館が形状の異なる蒔絵曲彖を一基所蔵する。徳川美術館の小池富雄氏に御教示いただいた。

〈附記〉

個々の作品を安全に調査に供するには大変な時間と労力を要するが、それを厭わず調査にご協力くださった各館の担当者の皆さま、また写真掲載をご快諾（図版11～15についてはご提供も）くださったルイジ・ピゴリーニ国立民族学博物館とスティッベルト美術館に、この場を借りて深く感謝申し上げます。今回得られた知見を今後の研究に活用していく所存です。なお、本稿は科学研究費補助対象、基盤研究A「日本における木の造形的表現とその文化的背景に関する総合的考察」（研究課題番号19202007）の成果の一部です。

（表1）ヴァチカン伝導民族博物館

通番	作品名【ID】	員数	形状	文様	技法	法量(cm)	時代(世紀)	備考(台帳より)
1	松梅蒔絵提重【As8339（212）】	一基	入隅長方形の枠に四段重箱・大引出に小皿五枚と大皿一枚・徳利二口・小引出などを仕組んだ行厨。天版に銀製梶葉形座金具の提げ手を打つ。	土坡に小松と梅。外枠の柱に破れ七宝文。	錫梨地に金・青金平蒔絵、金金貝、錫平蒔絵?、金切金、消粉蒔絵。	三六・八×二〇・四 高三八・五	江戸時代後期（十九世紀）	オガサワラナガヨシ伯爵（小笠原長幹）より教皇への一九二六年の贈品。
2	紋散蒔絵天目台【As4410（54）5531】	一基	六弁花形の天目台。	六弁花形の鍔の各弁表に蔦・桐・下り藤・丸に酢漿草・祇園守などの家紋。	銀梨地に金平蒔絵。口縁金地。	径一六・八 高八・四	江戸時代後期（十九世紀）	札幌フランシスコ会伝道会より一九二五年に寄贈。
3	高砂蒔絵軍配団扇形小箱【As8874（405）】	一合	輪郭が軍配団扇形の印籠蓋造、甲盛の箱。	蓋表は高砂の松と老夫婦、蓑亀。側面は八宝散。蓋裏は鶴三羽。	錫梨地に金・青金平蒔絵、金付描。	八・八三×七・四〇 高四・一三	幕末～明治時代（十九世紀）	海軍のHenri de LaurensのMadame Ruffin de Toursから一九二八年に寄贈。
4	柳枝垂桜蒔絵十種香箱【6336】	一合	長方形、二段、印籠蓋造、玉縁、塵居、甲盛の箱（面取なし）。下段、長側面に菊花形の座を彫金した紐金具を打ち、紫絹平織紐を通す。内容品なし。	土坡に柳と枝垂桜の図。天板には霞と雲も。	梨地に金・銀・青金平蒔絵、薄肉高蒔絵、金銀金貝、付描、針描。	二六・四×二一・四 高二一・四	幕末～明治時代（十九世紀）	教皇控えの間より移管。フルカワT・男爵（古河虎之助か）より一九三五年八月に寄贈。
5	住吉蒔絵手箱【As8930（403）】	一合	隅丸長方形、印籠蓋造、甲盛、塵居、銀置口の手箱。	住吉社の手前に太鼓橋、松並、鳥居、側面に灯台、石灯篭、茶屋。	淡い金地、金平蒔絵、薄肉高蒔絵、金銀切金、金金貝、トルコ石？の象嵌。内部と底裏は梨地。口縁金地。	二八・三×二三・七 高一五・四	明治～大正時代（二十世紀）	フジタH・男爵（藤田平太郎か）より一九二八年十月寄贈。セキグチ キシカワ 東京。

（表2）イタリア国立東洋美術館

通番	作品名【ID】	員数	形状	文様	技法	法量(cm)	時代(世紀)
6	松蒔絵懸盤及び箸【16820（23611）、16821】	一具	入隅長方形の懸盤一基と箸二膳の一具。箸先と懸盤の口縁および脚部内刳りに銀製覆い金具をつける。	松の折枝散らし。	斑梨地に金・青金平蒔絵。	懸盤四七・五×四八・五 高二五・〇 箸径〇・五 長三四・七	江戸時代後期（十八世紀末～十九世紀）
7	籬秋草蒔絵文箱【15994】	一合	隅丸長方形、甲盛、被蓋造、蓋の長側面に大きく浅く手掛を刳り、身の長側面に桜花形の銀製紐金具を打つ。	籬に菊と撫子。	黒地に金・青金平蒔絵、金付描、金切金。内部梨地。口縁金地。	二三・九×八・五 高五・四	幕末～明治時代（十九世紀）
8	菊桐片身替蒔絵菓子器【1035】	一合	円形、大型の平棗形、印籠蓋造、甲盛、碁笥底。見込と側面の際がなだらかでない。	菊枝と菊桐紋の片身替り。菊枝の図と菊桐紋散らしの図で天地が逆。	黒地と梨地に金平蒔絵、針描、描割。口縁と合口部金地。内と底裏黒地。梨地は家紋の位置を円く残して紋の先に施す。絵梨地なし。	径二〇・五 高一〇・四	明治時代（十九世紀末～二十世紀）
9	松竹梅蒔絵文箱【1036】	一合	隅丸長方形、甲盛、被蓋造、蓋の長側面に大きく浅く手掛を刳り、身の長側面に菱形の銀製紐金具を打つ。	土坡に松竹梅。紐金具は笹と桔梗（梅のくずれか）。	銀梨地、金・青金消粉蒔絵、金付描、銅？金貝。口縁金地。紐金具は魚々子地に蹴彫。	二三・八×八・七 高四・六	明治～昭和時代（十九世紀末～二十世紀）
10	破亀甲花菱に菊蒔絵提箪笥【18248（24473）】	一基	長方形、唐戸面取、一側面が引戸式に上に開き中に引出し四段をおさめた箪笥。四足つき。各角に唐草を蹴彫した真鍮製？飾り金具を打つ。	破れ亀甲花菱に菊。引出しの引き手金具は菊の花形。	黒檀に金・青金薄肉高蒔絵、金切金、金付描。面取部は金地。	一五・〇×一四・〇 高一九・二	明治～昭和時代（十九世紀末～二十世紀）
11	木地彫金象嵌硯箱【15994（23232）】	一合	長方形、面取、被蓋造、玉縁の硯箱。内は空。	波に千鳥、蟹、魚。	蓋表に波の文様を木彫し、金・銀・銅の彫金で表した千鳥や魚を象嵌する。側面内部は根来塗風。底裏黒地素文。口縁と面取部金地。	二五・二×二三・一 高四・九	明治～昭和時代（二十世紀）
12	蔦蒔絵重箱及び台【18247、28533】	一具	長方形、四方桟蓋造、二段重箱一合と三段重箱一合（五段重箱一合と替蓋となるか）および台一基の一具。（台と重箱二つの三梱包で別々に熟覧）。	蔦。	黒地に金平蒔絵、緑・赤の顔料を用いた漆絵に金消粉蒔絵の付描。口縁金地。内朱。底裏黒地。	二五・三×二五・八 高三段一七・〇／二段一九・二 台三二・二×三二・三 高一二・二	明治～昭和時代（二十世紀）

（表3）ルイジ・ピゴリーニ国立民族学博物館

通番	【ID】作品名（図版／挿図）	員数	形状	文様	技法	法量(cm)	時代(世紀)
13	楼閣人物螺鈿六稜花形食籠【130998 Ragusa】	一合	六稜花形、印籠蓋造、高台つき、蓋身とも大きく唐戸面取りした合子。（重箱の最下段と蓋か）。	楼閣人物と幾何学文。	黒地に薄貝の螺鈿。毛彫りあり。金属の撚り線象嵌。	径二二・三 高一〇・二（現状）	明時代（十六-十七世紀）
14	楼閣人物螺鈿軸盆【132343 Ragusa】	一枚	長方形、端反の縁つき、平底の盆。	画面を横にとった楼閣人物図。縁は菊唐草と幾何学文。	黒地に薄貝の螺鈿。毛彫りあり。金属の撚り線象嵌。	一五・〇×三九・四 高二・九	清時代（十八世紀）
15	楼閣山水堆錦平卓【131021 Ragusa】（※註15、p.257と326参照）	一基	長方形の天板の下に羽目板をつけ、その下の四隅につけた彫板の先端を足にする。このうち一本は決しつ。それぞれの足の裏は木地が見えており、あるいはもっと長い足を中途で切った可能性も。	天板に楼閣山水図。側面から足にかけて葡萄唐草。側面四隅に雷文。	赤い顔料を混ぜた漆に黒・緑・茶・黄の堆金。底裏は黒漆塗り。	三一・四×四六・八 高一二・一	琉球王国（十九世紀）
16	葵紋散らし蒔絵硯箱【4416】（図版12／挿図3、4）	一合	長方形、被蓋造、玉縁、蓋表を面取した硯箱。内に下水板一枚を敷き、硯と円形の金銅製水滴の座をと填めるが水滴は欠失。下水板の両脇に懸子を収める。	蓋表から面取り部、蓋鬘、身側面、懸子見込、蓋裏に、三つ葉葵紋を散らす。下水板表と硯の縁に唐草を表す。	梨地に金平蒔絵に針描、金具に付描、葵紋の円内に絵梨地。	二三・八×二一・七 高五・八	江戸時代（十七世紀）
17	楼閣山水蒔絵沈箱【4506～45013】（図版11／挿図1、2）	一合	円形、印籠蓋造、甲盛、蓋表のみ唐戸面取、敷茄子を二段重ねたような三足つきの合子。中に懸子を収め、その下に、甲盛、塵居のある棗形合子一合を中央に置き、その周囲に甲盛、塵居、印籠蓋造、平底の円筒形合子六合を置く。	蓋表に楼閣山水を描き、側面の合口部上下に多重菱繋文を帯状に巡らす。小合子の蓋表にはそれぞれ一つずつの二十弁菊花紋を置く。	黒地に金・青金平蒔絵、薄肉高蒔絵、金切金、付描。口縁金地。小合子塵居金地。立上がり、合口、内部は梨地。底裏は銀梨地。	径一三・〇 高八・〇（棗形小合子 径四・一 高三・八）（円筒形小合子 径四・一 高さ三・七）	江戸時代（十七世紀後半）
18	虫尽し蒔絵印籠【131909 Ragusa】	一合	上下を面取りした四段の印籠。紐、緒締、根付なし。	蝶、蜻蛉、飛蝗、鈴虫、蜘蛛、蝸牛、蜂、蝿などの虫各種。	黒地に金・青金平蒔絵、薄肉高蒔絵、金金具、金切金、切具。朱の絵漆がところどころに見える。内部は梨地。口縁と合口部は金地。	五・六×二・五 高七・七	江戸時代（十七世紀末-十八世紀）
19	楼閣山水蒔絵冊子形香箱【131648 Ragusa】	一合	冊子をずらして重ねた形を輪郭した印籠蓋造の小箱。	天板は水辺の庵、樹木、遠方の帆かけ船、遠山などを表紙に描いた和綴じ本二冊を重ねた図。身の側面に「綾新（花押）」と読める蒔絵銘あり。	黒地に金・銀・青金平蒔絵。内部は銀梨地。	一二・一×九・六 高四・二	江戸時代後期（十八-十九世紀）
20	山水螺鈿卓【1-105（13339 3/3）Ragusa】	一基	円形の天板の左右に持送りをつけた曲物製の脚をつけ、下端を円形の基台に固定する。基台には半裁木瓜形の三つ足をつける。	天板は山水図。持送りは七宝繋。脚部と基台側面は唐花。基台天板は土坡に竹。	黒地に薄貝の螺鈿。	一四・七×三一・三 高二〇・一	江戸時代（十八-十九世紀）
21	楼閣人物螺鈿刀掛【38375】	一基	三つの引出しのある横長の箪笥の、背面の板を山形に高くし、左右側面の板に刀5振りの受けを設けた調度。	正面の背板には幾何学文と楼閣人物図。左右側面の外面に梅、内面に竹。	黒地に薄貝螺鈿。（薄いグレーの下地と胡粉様の下地）。	二五・七×五〇・五 高四四・〇	江戸時代（十九世紀）
22	銀葉盤【132204】	一基	132209に同じ。ただし、天板に条線はなく、菊花がすべて違う形になっており、表を紺地菱繋牡丹唐草錦、裏を金地彩色の花鳥文で飾った帙を伴う。	香札の文様は、紅葉、水仙、梅、桜、竹、橘、柳、松、萩、菊。	黒檀に金平蒔絵。	六・五×一五・八 高二・五	江戸時代（十九世紀）
23	唐草蒔絵札筒【132198 Ragusa】	一合	黒檀製、正方形、銅張、印籠蓋造、天板に木瓜形の穴を開け、銀金具を打った香札用の筒。蓋鬘の一面は後補。	天板と四側面の周縁に唐草。蓋裏に朱漆で花押。	黒檀に金平蒔絵。口縁と合口部は金地。	三・九×三・九 高六・六	江戸時代（十九世紀）
24	銀葉盤【132209】	一基	黒檀製の箱の蓋表に金平蒔絵で条線を引き、菊花形の厚貝を貼って銀葉盤とし、箱の中に香札を入れた香札入一〇箱を収める。	香札の文様は、紅葉、水仙、撫子、竹、椿、柳、松、梅、菊、藤。	黒檀に金平蒔絵。	七・二×一六・四 高二・七	幕末～明治時代（十九世紀）

（表4）聖なる家大聖堂文書館

通番	作品名	員数	形状	文様	技法	法量(cm)	時代(世紀)
25	火道具及び香筋建【132550、133183、143283 Ragusa】	一具	銅製鍍金銀?、六角形、唐花を透かし彫りにした香筋建一基／銅製鍍金銀、閉じた扇形に文様を蹴彫した灰均し一本／黒檀製の柄に銀金具をつけ羽をつけた羽箒一本／同じく黒檀製の柄に銀製の箸先をつけた火箸の一本／火箸のもう一本の箸先を欠失したもの／先端を失った黒檀製の柄（火味見または香匙か?）。	灰均しに菊のような花。	形状のとおり。	香筋建　四・七×四・七　高八・七	幕末～明治時代（十九世紀）
26	茄子変り塗り盆【131032 Ragusa】	一枚	隅丸長方形、平底の盆。	茄子。	見込は青漆による青銅塗り風の技法。中に朱漆が少し交る。茄子は黒漆による変わり塗り。縁は青海波塗り風。口縁金地。底裏は茶漆に針描で木目を表す。	一一・七×一八・一　高〇・八	幕末～明治時代（十九世紀）
27	朱塗金銀箔押菓子器【130960】	一合	長方形、椀のように口縁を広くし、腰を湾曲させた、甲盛、被蓋造、高台つきの箱。	外面は網代状の刷毛目跡の上に金銀の大きな箔片を散らす。蓋裏には鹿、枯れ木、月、雲を描き、「好守斎苑咲（花押）」と読める蒔絵銘を記す。	外面は朱塗の刷毛目を残し、金銀箔を貼る。高台内黒塗り。内部は黒漆地。蓋裏は金薄肉高蒔絵、金銀平蒔絵、夜桜塗り。	九・九×二〇・八　高六・五	明治～昭和時代（十九世紀末～二十世紀）
28	鷹狩蒔絵硯箱【132340 Ragusa】	一合	隅丸長方形、被蓋造、甲盛、塵居、蓋のみ玉縁、蓋の長側面に浅い手掛を刳った硯箱。内に枠筆架を置き、硯をはめる。刀子一、筆二が付属するが、水滴は欠失。	松梅、鷹狩をする騎馬人物と犬を連れた従者。蓋裏には樹木と小禽。	黒地に金・青金平蒔絵、薄肉高蒔絵、金付描。	二五・〇×二二・八　高五・八	明治～昭和時代（二十世紀）
29	花唐草平文卓【165606、165607 Ragusa】（図版13／挿図5～7）	一対	円形の天板の下に彫板をつけ、彫板の先に三本の獣脚を設けて、その下端を三足つきの基台に固定した置物台。天板中央に何かを固定してた穴がある。	西洋の花唐草文様など。天板中央に「Scuola d'Arte Industriale Palermo」の黒漆（?）銘がある。	天板や基台の表などを赤い顔料を混ぜた塗料で塗り、残りは黒漆地として、金、銅、錫?などの厚めの板を文様の形に切り取り象嵌する。	径五三・〇　高九四・〇	一八九〇年前後

（表5）ピッティ宮　銀器美術館（※展示品をガラス越しに観察。法量は註10の文献より。）

通番	作品名【ID】	員数	形状	文様	技法	法量(cm)	時代(世紀)
30	IHS紋蒔絵螺鈿書見台	一基	目の粗い杉材のような一枚板からイスラムのコーラン台のように蝶番を彫り出した折り畳み式の書見台。	イエズス会のIHS紋の周りに萩と菊。脚部は蔦、裏面は蔦と橘と朝顔と思われるが破損が著しく不明瞭。小口は南蛮唐草。	肌色の下地を塗り、螺鈿を施し、黒漆を塗り、赤色漆を絵漆として、金銀の平蒔絵を施す。	閉じた状態で四九・七×三一・八　厚三・六	桃山時代（十六世紀末）
31	IHS紋描金螺鈿書見台	一基	目の細かい木材の一枚板からイスラムのコーラン台のように蝶番を彫り出した折り畳み式の書見台。	イエズス会のIHS紋の周りに星と雲。雲の輪郭に二重線。雲の中に菱形。IHS紋の円の中に薔薇のような椿、竹、麦または薄、雲、鳥二羽。脚部と受け台の裏は薔薇風の椿。小口に渦巻き。背面は柘榴。	灰いろの粗い下地に螺鈿を施し、黒漆に金消粉蒔絵、針描。絵梨地も消粉。背面の柘榴の葉には朱漆も。黒漆のヒビ割れは中国漆器によく見られるもの。	閉じた状態で四二・五×二六・七　厚三・三	明時代（十六世紀末）
32	楼閣山水蒔絵小皿A【MPP191Im.17144-5, 17147-8, 17150のうち】	二枚	幅広で内に向かって傾斜する縁をつけた深めの皿。玉縁。	縁は七宝花菱。立ち上がり上下に条線。見込に楼閣山水図。	黒地に金・青金平蒔絵、金高蒔絵。	径一一・五	江戸時代（十七世紀後半）
33	楼閣山水蒔絵小皿B【MPP191In.17149】	一枚	小皿Aに同じ。	縁は唐草。葉を線描する。立ち上がり上下に条線。見込に楼閣山水図。	黒地に金・青金平蒔絵、金高蒔絵、絵梨地。	径一一・〇	江戸時代（十七世紀後半）
34	楼閣山水蒔絵小皿C【MPP191In.17146】	一枚	幅が狭く水平の縁をつけた深めの皿。玉縁。	小皿Aに同じ。	黒地に金・青金平蒔絵、金高蒔絵、金切金。	径一一・〇	江戸時代（十七世紀後半）

（表6）バルジェッロ国立美術館

通番	作品名【ID】	員数	形状	文様	技法	法量(cm)	時代(世紀)
35	楼閣山水蒔絵小椀A【MPP1911nn.17151-60のうち】	二口	口縁の端反りの弱い、高台のある椀。	外面に楼閣山水図。見込みに草花。	黒地に金・青金平蒔絵、金高蒔絵。	径六・五-七・〇 高三・五-四・〇	江戸時代（十七世紀後半）
36	楼閣山水蒔絵小椀B【MPP1911nn.17151-61のうち】	一口	口縁の端反りのきつい、低い高台のある椀。	外面に楼閣山水図。見込みに水草。	黒地に金・青金平蒔絵、金高蒔絵、金切金。	径六・五-七・〇 高三・五-四・〇	江戸時代（十七世紀後半）
37	鶏蒔絵大平皿【MPP1911-17138】	一枚	幅広で水平な縁をつけた浅い皿。玉縁。（錫皿写し）	縁は大輪の菊・百合・椿・撫子の折枝および菊の折枝による花輪。見込は雌雄の鶏。	黒地に金・銀・青金平蒔絵、朱漆、金・銀高蒔絵、金付描。玉縁	径二九・五	江戸時代（十七世紀後半）
38	竹鶏蒔絵大皿【MPP1911n.17135】	一枚	内に向かって傾斜する縁をつけ、立ち上がりを湾曲させ、見込との境に段差を設けた皿。玉縁。（磁器写し）	縁から立ち上がりは七宝花菱を地文とし三方に絵窓を開け、楼閣山水図。見込は盛土に岩、流水、竹、下草、雌雄の鶏。縁と見込の境に金平蒔絵の条線。	黒地に金・銀・青金平蒔絵、金高蒔絵、朱漆、金銀切金。	径三三・〇	江戸時代（十七世紀後半）
39	花鳥蒔絵大平皿【MPP1911nn.17136-7】	二枚	幅広で水平な縁をつけた深めの皿。太い玉縁。（錫皿写し）	縁は鉄線・牡丹・桜・百合・菊・椿・撫子を西洋風唐草に仕立てた優れた意匠。見込は雉の番と菊・萩・桔梗・薄の折枝を左回りに巴状に配置。二枚の間で同一の下絵を使用するが、縁と見込で図がずれる。立ち上がりの上下境界に金平蒔絵の条線。	黒地に金・青金薄肉高蒔絵、銀平蒔絵、朱と銀による絵梨地風の平蒔絵、付描、朱漆。	径三四・五	江戸時代（十七世紀後半）
40	富士街道図蒔絵水差しおよび盤【MPP1811n.17172】	一具	挽物製で口の大きな西洋風の水差しとその受皿。盤の縁は幅広で、見込中央に水差しがはまる窪みを設ける。水差しの足に西洋製の金属縁をはめる。	盤の縁と立ち上がりは西洋風の豊かな花唐草。見込は社、橋、参詣者、茶屋、飛脚風の人物、鳥、網干などの山水楼閣人物図。水差しは街道図と富士と三保の松原。	黒地に金・銀・青金平蒔絵、青金薄肉高蒔絵、絵梨地、金金具、描割。水差し内部は梨地。	盤径五三・〇 総高二九・〇	江戸時代（十七世紀後半）

（表7）スティッベルト美術館

通番	作品名【ID】（図版／挿図）	員数	形状	文様	技法	法量(cm)	時代(世紀)
41	黒漆塗長刀の柄【21184】	一本	木製黒漆塗りの柄に金銅製金具をはめた長刀の柄。	金具部分に雲に鳳凰や花と紗綾形を組み合わせたような連続文。	木材を非常に粗い黄色と白の砂のような下地で覆い、布着せをした上に濃い灰色の下地を施し、朱色顔料も加え、黒漆を塗る。金具は金銅製で魚々子地はなく、墨挿しに蹴彫りで文様を表す。紗綾形は透彫。	柄のみ 三・六×二・六 長一六五・五	幕末～明治時代（十九-二十世紀）
42	耕作および港図描金茶箱【10079】	一合	長方形、立上がりのない合口造、英国Patent社製鍵金具とバネつき蝶番をつけ、左右側面に提げ手を打ち、中に錫製の箱を収めた中国製茶箱。	各面で完結する農耕図と港町の様子を描く。港町には「驗大船貨在此」「新基東約」「海関」「華光古廟」「聯興街」などと読める額をかけた建物。	黒地に金描、青金描、墨書。	二七・一×三五・一（提げ手を除く） 高二一・一	清時代（十九世紀）
43	草花蒔絵螺鈿小洋櫃【7643】（図版14／挿図8～11）	一合	長方形、蓋を蒲鉾形に湾曲させた小型の洋櫃。短側面は山形に高くして蓋を受ける。天板に提手、全面合口部に鍵金具、背面左右に蝶番一対をつける。中に鍵あり。	螺鈿を用いた菱繋、鋸歯、条線などで蓋と長側面を三区画、短側面を二区画に区切り、それぞれの区画に、紅葉、橘、椿、桜、鉄線、桔梗、女郎花などの花や実をつけた草木を表す。鍵金具は桃。蝶番は菊。	黒地に金銀平蒔絵、螺鈿。内部は黒漆塗。底裏の黒漆塗は後補か。	一三・二×二二・五 高一六・七	桃山～江戸時代（十六世紀末-十七世紀初頭）

44	蓬莱葵紋蒔絵交椅 【7597】 （図版15～17／挿図12～17）	一基	脚部を交差した折畳式の曲？。背もたれの上辺の延長を肘かけとして先端を蕨手状に巻く。脚部とその延長の肘かけの支えの柱を面取する。背もたれには湾曲した板をはめる。座面として革を金具で張るが革は後補か。革の裏に錦を貼る。前後の足の間に二本の帯（皮革・麻・錦を重ねた力布）を張るのも後補と思われる。	背板表は、土坡に流水、岩、小松、下草、群鶴を描き、霞の間に葵紋を置く。背板裏は、岩に松と葵紋。残りの部分は、花菱亀甲で覆う。金具は葵紋、蜀江文、唐草。	総体梨地、斑梨地、金高蒔絵、金・銀・青金薄肉高蒔絵、金・銀切金、金・銀・青金付描。金具は金銅製、魚々子地に浮彫や蹴彫。	最大幅七二・五奥行（現状）六六・三 高七〇・五	江戸時代 （十七世紀）
45	松椿蒔絵硯箱 【10083】	一合	長方形、蓋のみ面取、被蓋造、玉縁の箱。内部の下水板や懸子は欠失。	蓋表から蓋鬘、身の長側面にかけて、土坡に流水、車輪松、下草類。内部は素文。	梨地に金・銀平蒔絵、薄肉高蒔絵、付描、金切金　極付。口縁と面取部は金地。	二四・五×二二・三 高四・七	江戸時代 （十七～十八世紀）
46	松梅丸に立葵丸に本の字紋蒔絵黒棚 【12625】 （図版18／挿図19～24）	一基	婚礼調度の規格に則った黒棚。西洋製台の上に乗る。（台は近代の輸出蒔絵パネル貼り）。	各面に土坡に小松と梅樹を描き、余白に本多家のものと思われる丸に立葵紋と丸に本の字紋を散らす。厨子右扉裏に獅子、左扉裏には狛犬を描く。金具にも同じ家紋二種。	黒地に金・青金平蒔絵、薄肉高蒔絵、付描。厨子内、棚板の底裏は斑梨地。	三八・四×七七・五 高六八・六	江戸時代 （十八世紀）
47	初音蒔絵硯箱 【10085】	一合	長方形、被蓋造、蓋のみ面取、やや甲盛、玉縁、内に下水板と懸子一枚を収めた硯箱。下水板に銀製瓢箪形水滴と硯をはめる。（九鳩堂製如意文の墨が付属）。	蓋表は柴垣、梅に鶯、竹、岩に小松、下草類。蓋裏は土坡に流水、松、蓑亀、雲に月。懸子見込は土坡に流水、松と竹。	黒地に金・銀平蒔絵、薄肉高蒔絵、切金、付描。見込みと底裏はまばらな梨地。口縁金地。	二三・四×二一・三 高四・四	江戸時代 （十八世紀）
48	梅蒔絵硯箱 【10084】	一合	長方形、面取、被蓋造、やや甲盛、蓋のみ玉縁、内部に下水板と懸子一枚を収め、下水板に硯と後補の七宝製水滴をはめる（本来円形の水滴が入るよう造られた下水板を削り、長方形をはめる）。（中国製の色とりどりの墨が入る）	蓋表は梅の老樹の幹からのびる若い枝、下草類。蓋裏は、菊の花束。懸子の見込みに梅の折枝。	梨地に金・銀薄肉高蒔絵、金高蒔絵、描割、付描、金切金。口縁銀地。	二二・五×二一・五 高四・六	江戸時代 （十八世紀）
49	抱沢潟紋蒔絵百人一首箱 【10066】	一合	長方形、台挿造、蓋表のみ面取、台に紐を通し、身の側面に大きく手掛を刳り、身の内部を二区画に仕切った箱。内に、二つの帙に包んだ百人一首の札一式を収める。	抱沢潟紋散らし。帙の錦は梅と雪輪。	黒地に金平蒔絵、金付描。口縁と面取部金地。	一五・五×一一・三 高一六・三	江戸時代 （十八～十九世紀）
50	蓬莱三巴紋蒔絵手箱 【10062】	一合	隅丸長方形、印籠蓋造、甲盛、廛居、玉縁、身の長側面中央に金銅製魚々子地に三巴を蹴彫した紐金具を打ち、中に懸子一枚を収めた手箱。	蓋表の画面を縦にとり、蓋表で一画面、蓋鬘から身の側面で四画面とし、土坡に流水、松竹橘、鶴亀、鶴の巣と子五羽を描き、余白に三巴紋を散らし置く。蓋は前後を入れ替えても身の側面と図がつながる。	黒地に金・銀平蒔絵、絵梨地、描割、付描。口縁と合口部金地。	三四・〇×二八・一 高二四・〇	江戸時代 （十八～十九世紀）
51	菊蝶蒔絵煙草盆 【10165】	一基	長方形、引出し筥笥の天板に銀製の火入れをはめ、背面の蝶番で開閉する格子を透かした蓋を、引出しの一つに銀製灰落としを収納し、筥笥前面に銀製煙管掛けを取り付けた煙草盆。	各側面に菊の株に蝶。	木地に金・青金平蒔絵、金付描。	一五・五×二三・一 高二一・四	江戸時代 （十九世紀）
52	菊唐草雪輪に薄紋蒔絵香道具箱 【10097】	一合	長方形、印籠蓋造、蓋表のみ面取、内に縁つき四足つきの盆を収める。木地が厚い。	菊唐草の上に雪輪に薄紋を散らす。文様は面取り部にも及び、蓋の上下を入れ替えてもつながる。	総体同じ調子の詰梨地、金・銀・青金薄肉高蒔絵、付描、絵梨地、銀鋲。口縁と合口部金地。	一一・八×二〇・〇 高一一・五	江戸時代後期 （十九世紀）
53	紅葉の賀蒔絵文箱 【10067】	一合	隅丸長方形、甲盛、廛居、蓋のみ玉縁、被蓋造、蓋の長側面に半載木瓜形の手掛を刳り、身の長側面に銅製鍍銀の紐金具を打つ。	蓋表から蓋鬘、身の長側面にかけて、紅葉、幔幕、宝珠と雲龍を描いた火焔太鼓を描く。紐金具の座は唐草を四方にのばす意匠。蓋裏と身の見込の中央に二つ河骨丸紋を置く。	外面はまばらな、内面は密な斑梨地。金・銀・青金平蒔絵、薄肉高蒔絵、付描、金切金、極付、金金具。底裏梨地。切金は湾曲する隅丸部分にも。	三〇・五×一二・五 高九・三	幕末～明治時代 （十九世紀）
54	舞楽蒔絵香盆 【7488】	一枚	長方形、縁をつけ、底裏の四隅に板を刳り直角にとりつけた足をつけた盆。	蓋表に幔幕と舞楽装束を身につけた舞人。	梨地に金・銀平蒔絵、金金具、付描、銀鋲。縁は金地。底裏の梨地はややまばら。	二五・〇×三七・五 高三・六	幕末～明治時代 （十九世紀）
55	菊水蒔絵手板 【7510】	一枚	長方形の板。	岩に流水、菊、薄。	梨地に金薄肉高蒔絵、金・銀金具、付描、金切金。裏面黒漆塗。	一六・二×三〇・二 厚〇・七	幕末～明治時代 （十九世紀）